

ささえてくれた一本の樹

平池 真里 神奈川県小田原市 六十六歳

突然体調が悪くなり入院したことがある。

同室の患者さんと話す元気もなく、ベッドの周りのカーテンを閉きつて、遮断してしまった。点滴につながれ食事も禁止され、天井を見るだけの生活が続いた。

四、五日たつとやっと元気が出る。病棟の端にあるサンルームに点滴をお供に行ってみた。山の斜面が近くに見える。二月の窓の外は寒々とした薄墨色の霧がかっているように思えた。周りの景色に埋もれているが、斜面にすくつと立った一本の樹が見えた。その木が気になりサンルームに通うようになる。

何日かすると枝に緑つぼい蕾みが見えだした。サンルームに通う度ほんの少しずつ蕾みが、むくむく膨らんでくる。

そのうち点滴がはずれ、窓から見るあの木に会えるのが楽しみになった。木の幹は存在感を増し、蕾みの先つぼはピンクから濃いピンクになり、ほころび始める。

もう五分咲き…あと少しで八分咲き…

味気ない病院生活にぽつと明るさをそえてくれた。枝は淡いピンクのベールをかぶせたようになった。

やがて満開の桜だ。ふり注ぐ太陽のあたたかく優しい光の粒に照らされて生きることへの喜びを表しているようだった。

窓の右端に見える幼稚園は、入園式らしい。

もう春なのだ！

気がつくつと、自分のベッドの周りのカーテンを開け放していた。